

〈脱プラについて〉

1950年頃から本格的に生産が始まったプラスチックは、私たちの暮らしの中でなくてはならない欠かせない存在となっております。特に、21世紀以降、驚異的な伸びを見せているのは、飲料ボトル、ボトルキャップ、食品トレイ、外装フィルム、レジ袋など、容器や包装に使われているものになります。商品の輸送や保存、衛生管理に役立ち、いまや日々の暮らしで目にしない日はありません。しかし、これらは使い捨てであり、生産されたその年のうちにゴミになってしまうものがほとんどです。生産量が多くなれば、当然、ゴミの量も増えます。調査によると、1950年に年間約200万トンだった世界のプラスチック生産量は、年々増加し2015年には4億700万トンにまで膨れ上がっています。一方、廃棄されるプラスチックも同様に増え続け、2015年には3億200万トンが廃棄処分されています。

◎プラスチックごみ問題

そして、本当の問題になってくるのはこれらのゴミの行方です。2015年の全世界の容器包装プラゴミで見ると、リサイクルされたのは14%に過ぎません。残りの86%のうち、埋め立てや焼却に回されたものを除くと、なんと32%が「流出」しているというのです。こうして流出したゴミのうち、あるものは土壌に堆積し、あるものは海にたどり着きます。海洋プラゴミの発生源のひとつは、ここにあると言えます。さらに、あらゆる産業分野でもプラスチックは使われており、膨大な量に上ります。そしてこれらはすべて、いずれは廃棄物となっていくのです。これらが適切に回収・処分されていけばよいのですが、残念ながら不法投棄されてしまうこともあります。こうした中で、「ウミガメにストローが刺さった」「クジラの胃袋の中から大量のレジ袋が出てきた」「ウミガメが魚網に絡まり窒息する」分解されずに残ったマイクロプラスチックによる生態系への影響など、人類にとってショッキングなニュースが日々流れてくるのです。

◎脱プラスチックへの道

1990年代から始まったリサイクルの取り組みは、一定の成果を上げているものの、プラゴミ問題の根本的な解決にはなっていません。国連が示したSDGsでも、廃棄物の発生防止と削減に重きが置かれているようにいま最も早急に進めなければいけないのは、プラゴミを極力出さないようにすることにあるでしょう。プラスチックに限らず、ゴミ問題の対策としてかつては、Reduce、Reuse、Recycleの頭文字をとって「3R運動」が進められてきました。それにRefuse(使わない)を加えた「4R運動」が推進されているのが、世界的な傾向です。当初はリサイクルすることこそが、環境に配慮した暮らし方だと言われていましたが、2000年以降使い捨て容器包装が爆発的に増えたため、考え方が変わったのです。

日本では、リサイクル、焼却が優先になっていましたが、欧米アジアで先行しているレジ袋削減にならない、2020年7月よりレジ袋の有償化に踏み切りました。無償配布の条件もありますが、脱プラに向けての大きな試みになります。

◎ポリ袋メーカーから見た景色

捨てる社会から捨てない社会へ。ゴミをなるべく出さないように暮らす「ゼロ・ウェイスト(ゴミゼロ)」の取り組みが世界各地で始まっています。プラスチック削減のため、皆さんの目に映りやすいレジ袋を減らしていこうという取り組みはよくわかります。しかし、一方でお伝えしたい事実もあります。**ポリ袋はエコな素材**でもあるのです！

原料であるポリエチレンからはダイオキシンなどの有害物質は発生せず、また、ポリエチレンは石油精製時に必然的にできるので、ポリ袋を使用するのは資源を無駄なく使いきることにもなります。また、ポリ袋は薄いので資源使用量が少なく、安価。さらに**ゴミとしても目に見えるごみの1%未満**に過ぎず、海洋プラスチックゴミでもわずか 0.3%しかありません。さらにそのゴミも自治体によってはサーマルリサイクルし、ゴミ焼却燃料になります。そのゴミだってレジ袋として使用した後のリユースが多いので、資源を無駄なく使っていることになります。さらに、繰り返し使用のエコバッグより、都度使用のポリ袋はとても衛生的。新型コロナウイルスの脅威にさらされている 2020 年 9 月現在の状況では、とても重視したい一要素です。

ポリ袋メーカーとしてクリーン・アシストが取り組んでいきたいこととして、まず第一に**ポリ袋の薄肉化の提案**になります。これは、現在ポリ袋を何らかの形で扱っている皆さんにとってもすぐにできるとも有効な手段です。従来使っているポリ袋を、適正な範囲の中で薄くすることによって、資源の節約になるのと同時に使用される皆様のコスト的な節約にも繋がります。2020 年 7 月に法制化されたレジ袋有償化の条件として、バイオマス原料 25% 配合というものがありますが、バイオマス原料を使わずとも 25% 薄くできたらと考えてください。厚みを変えずバイオマス原料を配合してコストをかけずとも、25%とは言わなくても使用に支障のない範囲で厚みを下げて適正な厚みのものを使うのは、手っ取り早く効果的です。弊社製品で一つ例を挙げさせていただきます。HDPE ゴミ袋で、HN シリーズという製品があります。これは、従来の HDPE 原料に加えて、他では扱っていない強い素材をブレンドしているものです。今まで、厚手のゴミ袋と言えば、LDPE が使われることが多かったのですが、弊社 HN シリーズであれば、LDPE の半分くらいの厚みでも使用に差し支えないと考えております。もちろん、同じ HDPE でも 50%とはいきませんが同様です。(用途にもよるので実際にお試しした上で判断いただければと思います)

第二に、長期的な視点で見ると、バイオマス原料や生分解性プラスチックを採用した商品を企画していき、皆さんにご紹介していくことが社会的貢献に繋がるメーカーとしての責任になるのではないかと考えております。しかし、バイオマス原料は現在、南米のブラスケン社のみ扱いに留まっており、供給不安が付きまとっています。生分解性プラスチックも供給面や品質強度面で、安定供給にはまだ時間がかかると考えられます。そのような中でクリーンアシストとしてはまだ扱いはごく一部に限られていますが、ポリ袋メーカーとして脱プラ問題の解決に向けて、製品開発に向き合いたいと考えております。